

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第209号（2025年4月春号）

常世の風に吹かれて呟いて（15） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2016年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・春の小嵐が吹いて今日の活動はお休み

昼前までは温かい春の陽気であったが、昼近くから風が強まり、午後には春の小嵐となった。

穏やかだった午前中、草むしりをしておかないと、二時間ほど草達と格闘した。

午後にもう少しやつつけておこうと思っていたが、強雨に風が強くなり、冷たくなってきたので今日の活動は終わりにする。

ニヤンスは、少し部屋の気温が下がると、直ぐにやつて来て炬燵をつけるとステレオで要求する。

電源を入れると直ぐに炬燵にもぐりこんで昼寝を始める。お犬と小生も足を入れているうちに睡魔に襲われ、寝たりの仲間入り。

やつておかなければならないデスクワークがあったのだが、炬燵の誘惑に負けてしまった。

ガタガタ戸を揺らす音に目覚めると、外はかなりの強風が吹いていた。

午後の時間は未だタップリとあるので、予定していた作業をしようと机に座るが、折角誘惑に負けて寝たりにしたのだからせこく少しでも、なんて考えるなど本を読み始める。

手にした本は、もう何度目だろうか。最近の本で

あるが、もう四度は読んでいるだろう。

小説の面白さは、何度読み返してもその時の心の状態によって、語りかけてくるものが無限にある事だろう。小生は、気に入っても気に入らなくても最低三度は読み返す。

好きではない小説でも、その都度語りかけてくれるものが変化してくる。小生の読書は、100冊買って来ると、300〜400冊買って来たのに相当すると思う。読むことの楽しさが増せば増す程、書くことが比例して楽しくなってくるものである。（2016年4月1日）



（絵：兼平智恵子）

・満開の桜の下 紫の色に染める諸葛菜

雨よ、降るなら確り降れ！ そう声したくなる日であった。

ぐずぐずした午前中を過ぎ、夕近くには晴れて陽が射して来た。陽が射してきたと思うや、憎つき野草たち一斉に背伸びする。

三時過ぎ、陽射しが出てきたのでお犬様と散歩に出る。

草むらの先に桜の木がありほぼ満開に咲いている。

近くまで寄っていくと桜の木の下の下が紫色に染められていた。諸葛菜の花である。

桜色と青紫色のコントラストが絶妙な塩梅に映えていた。

朝からうつとうしい気分だったのが桜と青紫色の色に癒された。

草むらから出る時、空き家の庭に黄色の水仙が群生して咲いていた。

鬱陶しいなどと言っていても春である。

明日、明後日には玄鳥至る（つばめきたる）の候である。

明日も今日のようなはつきりしない陽気なのだろう。（2016年4月3日）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

陣屋と陣屋門

兼平智恵子

現在の茨城県のほとんどが常陸国と言われていた時代、ここ石岡に国府(現在の県庁)が置かれ、政治、文化の中心であった。

大化改新(645)以前は新治、筑波、茨城、仲(那賀)、久自(久慈)、高(多珂)の六つの国に分かれていました。大化改新後にはこの六つの国に、鹿(香)島、行方、信太、白壁(真壁)、河内が加わり十一郡となり、それぞれに郡家(郡の役所)が置かれ、常陸国が誕生しました。

鎌倉、室町時代と中世には、桓武天皇の曾孫、高望王が平の姓を賜り上総国の介(国司の役職名守、介、掾、目)に任ぜられ、その高望王の子、良望(後に国香)が常陸国の初代大掾となります。

この常陸大掾の職が世襲のようになり、職名が転じて、常陸大掾氏として、戦乱の世の中、勢力を保っていきますが、一五九〇年十二月、二十四代大掾清幹の時、常陸太田の佐竹義宣に攻められ落城。六六〇年続いた常陸大掾氏は滅亡しました。

大掾氏滅亡後、佐竹義宣、義尚の所領となりましたが一六〇二年佐竹氏は秋田に国替えを命ぜられ、替わって秋田の六郷氏が府中を領し、次いで一六二二年より皆川氏が領し、一七〇〇年に領主となった松平播磨守頼隆を初代として、以後代々松平氏が領主となって明治維新に至ります。

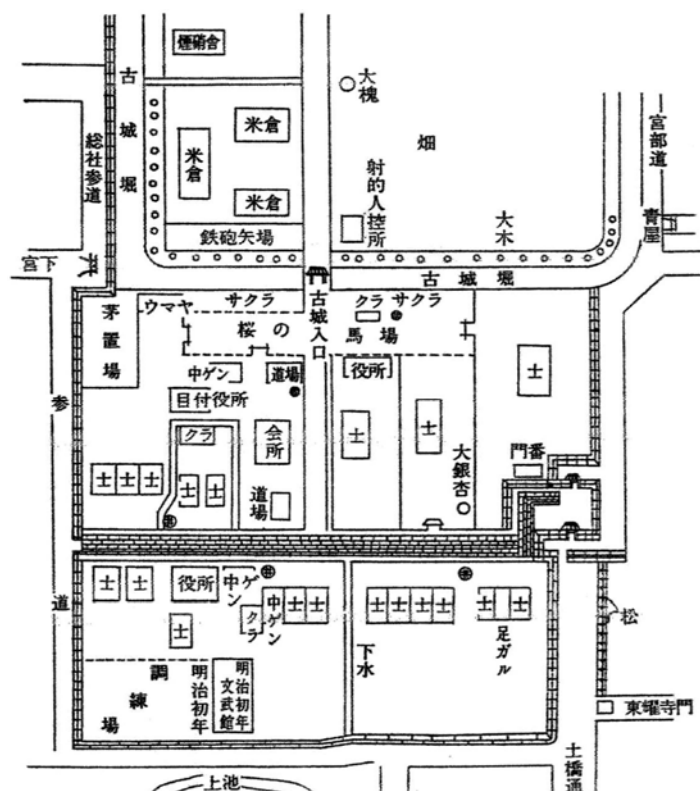
現在の石岡市立石岡小学校の敷地内には、常陸国の国庁が七世紀末辺りから建造されはじめ、十世紀初期辺りまでの建物跡が確認され、その建物跡は、現在の校庭を中心に地下に保存されています。

中世になりますと常陸大掾氏、第一五代詮国によって一三四六〜一三五一年にかけて、築城され

た府中城の土塁の一部が大木と共に残されている。江戸時代は、松平頼隆によって府中藩が成立し陣屋(江戸時代に代官その他の役人が在任した屋敷や役宅は、陣屋あるいは陣屋敷と呼ばれていた)が置かれました。

府中藩松平家は定府だったため藩主は常に江戸に住んでいました。陣屋絵をご覧下さい。一八二八年陣屋門が建築された後の絵図でしょうか。明治に入ってから陣屋門は土橋通りの突き当り、直接の入口、石岡小学校の校門としての役目にかわりました。陣屋門の後方の門は不浄門。

この辺りからは、解体された市民会館の跡で現在は空地になっています。この頃も大木はあったんですね、○がついているところは府中城の土塁と思われる。更に西の方に畑、現在の校庭あたり。



畑より左下に目を落とすと古城入口、現在は東校門入口、重い鉄扉で閉められている。

文政十一年二月十八日に落成の陣屋門。

火災にあつた江戸藩邸を再建する際の余材をもつて作られたといわれています。

明治二年の版籍奉還まで、この陣屋で藩政が行われ、明治初期に陣屋門を除いて建物は取り払われました。

造りは、本柱の上に妻破風造りの屋根がつき、控柱の上にも本屋根と直行するそれぞれ別棟の小屋根がつき、扉と控え柱を覆っている高麗門の形式。また冠木が本柱を貫き通し、棟木との間に格子を組み入れる華麗な手法。控柱には樟樹(良い香りがするといふ)を使用。昭和三十五年三月二十一日県指定文化財になりました。しかし、市民会館の建設予定地となり、

色々な問題も解決しないまま、昭和四十三年四月
市民文化の殿堂・市民会館のオープン。

昭和四十三年九月、陣屋門は県指定有形文化財
としての史跡から建造物へと指定変更され、翌年
昭和四十四年三月石岡小学校敷地内に移転されま
した。移転先は先の陣屋絵図の古城入口辺りで、
現在はふるさと歴史館の入口になっています。

現在陣屋門は解体修理後、ほぼ元の位置に戻り、
堂々と勇姿を誇り、石岡市民のみなさんの幸せを
見守っているかのようです。

いしおか昭和の肖像より 次の言葉が心に残
りました。

「史跡保存は、単なる歴史素材の保存ではなく、
ふるさとの生活環境をまもるためにも大切なこと
である。肥沃な土地に豊かな作物が実るように、
歴史と文化が大切に保存された土地には豊かな心
が育つてゆく」



2002・4 陣屋門前にて

○旅立つ弟黄泉の国の妻に誘われて

智恵子

我が人生の回想 20

木下明男

昭和100年……。そして今は4月、諸々のメ
ディアニュースでは新しく社会に参入する青年
が取沙汰されている。私自身も社会に参入したの
は60余年まえ……。？思えば、随分と長く生き
てきたものです。戦後からの疲弊生活、朝鮮戦争
による軍需景気、安保闘争、労働争議、学生闘争、
労働組合の再編、そして急成長経済、バブル景
気……。それらの影響(土地バブル)で「労音」
にも余りある資産が生じた。法人登録のない任意
団体「労音」は、その財産確保のため「会長と
税理士が画策し、資産を確保する事が出来た。都
内の地域拠点に6ヶ所の会館建設、そして茨城に
ギター文化館の建設。大切なのは、これ等生じた
資産財産を守ることではなく、決して個人のもの
ではないので、どう皆に返していくか？労音であ
れば、会員の利益に返却していくかです。老い先
短い筈の私は、未だに私的なとらわれ方しかでき
ていない……。大変恥ずかしい。ともすれば、永
い間活動してきた行為(自らの生き方の筈)に対
して、どうしても報い(評価)を求めてしまう。

1990年以降、永い文化運動とそれ以降の活
動の中で経験した3つの裏切り!(悔い……?)

① 最初は、前回号で紹介したギター文化館建
設と財団創立に関して、I会長とS税理士
の功績抹殺と組織からの排除。私も労音の
委員長、財団の会長を辞職……。同時期に、
40年近く務めた会社(Nikon)も退職し地
域労音の事務局長として働くようになる。

(55歳だった)それから6年、東京と松戸

で地域労音の事務局長として働き、2000
2年からギター館の代表として石岡市の地
域活動と共に働く。オーナーの労音本部か
ら70を過ぎた時期から退職を迫られ、75歳
でギター館を辞職する。

② ギター館の退職に当たっては、本部組織と
ギター館の運営者から、濡れ衣を負わされ
(横領の疑い)を掛けられ即日追い出され
た。拳句の果て労音の代表者からは、裁判に
掛けるなど不在らぬことを言い出す始末……。
全くのリス・ペクトさえナシ、50年も働き、
生涯を掛けたものに対する扱いとは到底思
えぬものだった。

③ 過去2件に匹敵するのが、今回の事務局長
退職の件です。言い分は色々あると思うが、
思い通りにいかないからと、同じエリアで
同じ職に就くとは信じがたい。

これ等の評価は、自らがどう感じたかであって、
大切なのは残された組織や団体が、本来の目的に
対して、社会からどう評価されているかです。実
際には、労音と言う鑑賞団体もギター館と言う建
物も、其々の社会の中で存続し、また大きな役割
を果たしています。嘗てその一翼を担い、今の礎
を築いたと言う、自己評価(自己満足でもいいか?)
できる人間でありたいと思うのですが？



地域に眠る埋もれた歴史(97)

木村 進

【まほらの里】(5)

ブログ(まほらにふく風に乗って)の(2011年のブログから)いくつか興味深いと思われるものを何回かに分けて抜粋して取り上げていきます。今回は「ガガイモです」です。

かすみがうら市の旧出島地区の戸崎城本丸跡で面白いものを見つけた。



城跡は畑が広がり、その周りには枯れ草が残っていた。その枯れ草の中に写真のような実があった。どうやらガガイモの実だと思う。

半分に割れ、中の綿毛のついた種はすでにどこかに飛んでいってしまったようだ。残ったのはこんな空の殻。

日本神話ではスクナヒコナはこんな船にのって日本(出雲)にわたってきた。

そして、日本に菓の知識を教え、温泉も掘り当て、温泉が体に良いことを教えた。

この小人「スクナヒコナ」は菓の神様でもあり、温泉の神様でもある。

スクナヒコナ(少彦名)が乗っていた船が天乃羅摩船(アメノカガミノフネ)なのだが、これがガガイモの実だというのだ。

ガガイモの実は秋に実が割れて冬には綿毛のような羽根がついた種がたくさん風に飛んで散らばっていく。

今の時期はもう種はみんな飛んでいって殻だけが残る。この殻はちょうど水に浮かべれば船のように浮かぶだろう。

出雲に渡ってきたスクナヒコナは日本語が喋れなかった。

物知りの「山田のかかし」が素性を勝手に知らせてただけだ。本当の素性は？

日本の国造りで大国主命(おおくにぬしのみこと)の手助けをして、ほぼ統一を成し遂げると、粟の茎に登ってその茎の弾力ではじかれて常世の国に飛んでいった。

この粟の場所が現在の和歌山県加太の淡嶋神社とされる。

飛んでいった先は常世の国だからきつとこの茨城だろう。

茨城でスクナヒコを祀る有名な神社は酒列磯前神社と大洗磯前神社である。

こんな鳶のような草の実がなぜ神話に載ってくるのだろうか？

この常陸の国は縄文時代には1万年以上にわたり平和に暮らしてきた縄文人がいた。

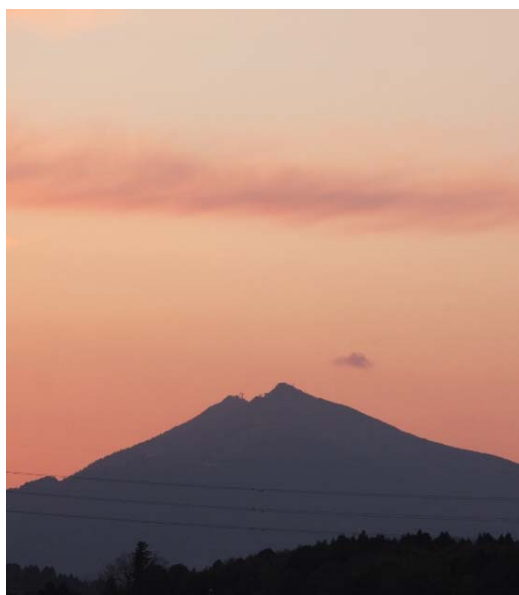
この常陸には縄文人が木の実や貝を食べ、魚をと

り、獣を追いかけて暮らしていた。食べ物も豊富で、まさに常世の国だった。日本国を牛耳った藤原氏はこの常陸国の鹿島の出身とも言われている。

こんなことが、この戦国時代に小田氏・佐竹氏の勢力争いで滅んだ戸塚城の何にもない昔の城跡と言われる野原に残されたガガイモの実から、走馬灯のように想いが駆け巡ってくる。

この地ももうすぐ春の息吹が感じられるでしょう。この台地の下には蓮田が広がっている。レンコンの収穫は水の冷たい冬です。今度は、霞ヶ浦周辺に広がるレンコン畑を見てみよう。

今日の夕方つくば山が綺麗に赤く染まった。



いつも思うが、石岡の恋瀬川から見た筑波山は姿がいい。
(2012年3月)

御留川は忘れられていく 伊東弓子

師走十九日の朝、犬との散歩途中、堤防で衝撃を受けた。やっと芽の出た菜の花の苗を踏みつけて、切った枝が積んであった辺りを見渡すと、土手の下に三本あった大きな柳の木は跡形もなく姿を消していた。そこは堤防が出来る前の霞ヶ浦の水際だった。太古時代、流れ海時代は水底だっただろうが、四十八津の頃、御留川時代も霞ヶ浦時代も波が寄せ、引いては浄化されて、物を運び歴史を綴ってきたのだ。この堤防が出来てからは一変した。大きな水溜まりとなつて、漁は勿論、湖自体が息することもできなくなった。そこには魚も、鳥も棲めず、水草も生えなくなった、人も遊んだり、泳いだりすることも出来なくなった。自然の中で、人間が共生することはできなくなったことを思うと悲しみから怒りに変わって眺めた。この地域で生きてきた親や祖先の喜びも、悲しみ、楽しみも怒りなど豊かな感情も全部消されてしまった思いだった。現代人の優しさ、愛や思いやりが育つこともないだろう。こんな気持ちでむんむんと、散歩の足を早めていた。頭はカッカッと熱くなり、胸はムンムンと膨らんでいた。

五、六年前、常会長会議の中で、この柳の木の話が出たことがある。

「どういう理由で切るのかな」

「邪魔になる程のものでもないよね」

「お金もかかることだろうよ」

「どの土地か、わかっているのか」

「あれだけ太いんだから、年月も経つてだろうよね。今さらなくてもね」

など、いろいろな意見が出た。その時私は、切る

ことに大反対したことを覚えている。命ある物を邪魔になるものでもないのに何故と・・・言った事を覚えてる。私達の先祖の生活を確り知っている証人でもあるし、貧しさに耐えてきたことも、その中で私達を育ててくれたことも忘れてしまいうような気がして、心は穏やかではなかった。

“ああ、私が常会長をやめて二年後、うるさい人がいなくなってこれ幸に”と切ったかな。

十七日の朝の散歩の時にはあった。確かに、目の中に入っている。切急いだのかと思うと余計に憤りが激しくなった。

“いづみ”との散歩は実に楽しい。季節感を肌で感じられる。発見がある。人との出会いがある。

それ以上に私の精神訓練の場で、今まで大嵐、外泊の時以外休んだことがない。その日は地区外れにえんまの方へ向かった。若い頃みた小舟七・八艘出入りして停めてあった所だ。先には鳥居があり、小宮川という漁場で、台の麓に鉾の宮が祀られてあった。鉾の宮と川向うを目どおしで線をひき、高浜三村側境堂を小獵場とし、両村の漁場とした。石川、高崎側は御留川とよばれ水戸藩の漁場の境だった。その名残りの鳥居が倒れ、崩れてえんまの淀みの中に突き刺さっていたのを、四、五年前、当時の区長、常会長さん達に頼んでえんまに渡したコンクリートに置いてもらった。あの時は本当に良かったと有難さを感じ、通るたびに「健在、健在」と喜んでいたのに、今日見たらなかった。

一つ一つ無くなっていく、川岸に石岡の人が江島川岸、姿はなくても水門の名に残っている。ここから府中に向かう“江島道”も忘れられていってしまう。今必要なければ使わない、使わなけれ

ば忘れられてしまう、消えてしまう、との思いで、重い足どりであるいた。

目を追う度に気が立って興奮状態になるのを覚えた。区長二人に訴えようと気がたつた。又悲しくもあった。二方所の出来事が偶然か、関係ないのか悔しかった。思う度に悲しかった。誰にも聞かせられなかった。その中、区長始め、常会長一人一人に聞いてみよう。気持が収まらない状態だったが、忙しさが続いて他のことに気をとられている中に頭も心も冷えていったのか、一寸大人げないと思いはじめた。冷静になつてくると、よい案が湧いた。今度歩く「冬の漁場、玉里御留川」ということで昔と今、御留川と霞ヶ浦の状況報告をしながら見てみようと思ふと決心、我ながら「頭いい！」と自画自賛した。

「高崎の今昔の姿に思う」と題して、急遽、漁の盛んだった一月に行つた。高崎地区には沢山チラシを配つたが、参加者は少なかった。関心はいまいち。あまり気にせず出掛けた。

深つば 冬のうみはさみしい、ましてここはのろわれた場所だから風が冷たい。

恵比寿神社 御留川の漁始めの神事が行われた砂浜だった所、威勢のいい男達の姿ももうない。心暖かい御夫婦が「節分も近いからと、掃除をしていた。」

切られた柳の木 初めて見た人達ばかりだからあまり個人的な意見はなく、私もいらだたないように話しをすすめた。

えんま 枯草が生い茂り、神域の思いこめた場所

もお粗末な姿だったが、参加者が歴史に詳しい人と、地元のはなしが詳しくてよかった。境のことで二転三転と頑張った当時の漁師たちの姿を改めて思った。

さあ、愛郷橋から三村、石川境の境堂へ向かった。途中ダンプカーにも何台もあった。大元の恋瀬川が霞ヶ浦へ流れ込んでいた辺りの大工事、鋼板で囲われている箇所から中が見えるという説明を聞いて、覗き窓から中を見ることが出来るそうだ。驚き、古代海底だった所だろう。ユンボが泥をトラックに積んでいる。玩具のようなダンプとユンボが泥を積んだり選んだり忙しく動いている。出かけたと思うと、戻ってくる忙しく動いているが、この泥どこへ運んでいくのか。太古の生物の化石など、ないのかなと、思いが頭を素通りした。事務所の人の話では那珂川から水が来るだけでなく、霞ヶ浦の水は汚れている外来魚や稚魚が行かないような設備が出来るとのこと、完成など先の先、地下を削っていく様子、想像もつかない。こんな地球の中をいじってもよいものかと、ただ驚き恐ろしいとも思いつながら「那珂川導水事業」とやらを見てきた。ただ驚くばかり。

来た道に戻って“深つぼ”の近くの天王宮へ向かった。石岡台地の事業で、ここから霞ヶ浦の水を農業用水として、美野里・岩間の方へ送っている施設だった。小学生の頃、ここでよく父に連れて行ってもらって泳いだ。遠浅で魚も貝も良く見えて楽しい日々があった。今は思い出だけになっってしまった。工事中で近寄れなかった。近くにあって施設や事業を知らないことがあるというより知らないんじゃないかと思った。というより、知ろうとしないことが多いように改めて思う。

活動も済んで、少人数でも人に訴えることが出来たことで収まりついた私の心だったが、一応二人の区長さんに聞いてみたいと思った。

柳の木のこと、国土交通省が切ってくれたという。水路があったからだとのことだった。

えんまのこと、全く知らないとのこと。これできりがついたと思った頃、一月号に載せる菅の原稿が（ムンムンしながら書いたこの原稿）積み重ねてあった本の中から顔を出した。ああ！よかつたと思つた瞬間、又々ムラムラが湧いてきて麻生出張所へ電話した。

地元の議員さんからの依頼で現地も見、地元の要望とも思い、予算を組んで一年位かかったとのことだった。水路はどこにでもある。もうここまですにしようと思ひペンを置きます。何でそんなにと、笑われかもしれませんが、執念なのでしょいか、私は何でこのことにこうも執着したのでしょか。

（令和七年四月二日）

陰陽神社

小林幸枝

常陸大宮に鎮座されている「陰陽神社」を参拝させて頂きました。「陰陽神社入り口」の看板が目にとまり、「陰陽神社」という珍しい神社に興味を湧いて、寄ってみました。

陰陽山森林公園の駐車場に車を停めて歩いていくと、鳥居から素晴らしく神秘的な神社でした。明神鳥居は、昭和26年に建立されたもの、そこから急勾配で長く続く石段は、登るのにキツイ階段

でした。陰陽神社を建立されたのは、水戸徳川光圀公でした。

息苦しい階段を昇り、ようやくお社が見えました。もう着いたと思つたのが、1つ目の拝殿でした。まだ山頂にご本殿がある！！ここは、山頂まで行けない人のための拝殿らしいのです。やつと着いたと思つたら：何？何者？珍しい狛犬？変わったる？



狛犬様なのだが、靈獣でした。

漢字で書くと「貔貅(ひきゅう)」「貅貅(ひきゅう)」両方の漢字が読めない。貔が雄で、貅が雌とされている。勇ましい靈獣でした。



「ひきゆう」は風水で用いられることも多く、金運アップに人気らしい。陰陽神社からは、夫婦円満や子宝のご神徳をいただけるが金運アップにもいいのかもしれない。



陰陽神社ご本殿裏には、「陽石」「陰石」があります。

晴天を陽石に慈雨を陰石に祈り、安産、夫婦円満の神々として信仰されているそうです。

「陰石」はありましたが、「陽石」はどこがある？と探してみましたがありませんでした。東日本大震災の影響で崩れてしまったみたいです。残念でした。

頂上に登り、展望台から眺めてとても気持ち良かったです。

陰陽神社

常陸大宮市山方427番地

風と共に

《理》

大輪 啓展

毎回違ったテーマにて書かせて頂きます。
今回のテーマは、「新年度と愛犬」

新たな一年度が始まります。
学生さんは卒業と入学、はたまた就職や巣立ち、社会人なら、人事異動、新入社員、退職だったり、様々な人生の折り触れてそれぞれに思う事もあるでしょう。

かくいう私も同様に、私生活では子供達が就職やら一人暮らしで、妻との2人十ワンになったり、職場では三分の一が新入社員という重責を担わされたり、良いのか悪いのか、新たな人生の始まりだなと感じております。

皆さんはいかがでしょう？

数日前、娘が就職とともに会社の寮移り住む事になり、引越し作業に追われていました。

いざ、妻と2人になると、娘の居る時は感じませんでしたが、寂しくなるもんですね、当たり前ですが、些細な変化で大きく変わってしまうと感じるのですから。

子供の巣立ちですから、喜ばしい事なのですが、複雑な気持ちになりますね、

皆さんにもこんな経験はありますか？

また、職場に於いても、目まぐるしい日々が続きます。

職場拡大から、人材不足のため人事異動により経験者が配置されるものと踏んでおりましたが、次々と新入社員を配置され、気がつけば大半が新人となっていたのですから。

今年度の始まりから、大きな変化を受け入れざるを得ない、そんな始まりです。

忙しさのあまり、中々原稿に向かう時間も取れず、今回はここで終わりにしようと思います。

楽しみにされている方が一人でもいるなら、とても申し訳なく思います。

次回お会いするときには、時間に余裕があると余裕が持っていると願いながら、また次回お会いしましょう。



前号に続き、時の中国皇帝武宗(ぶそう)の道教狂信による仏教弾圧が苛烈をきわめていく様子が日記に記されているので、そのあたりを「円仁の巡礼行記原文訳」を参照引用し辿っていこう。(行記巻第三)。

中国皇帝武宗は十月九日。全国のすべての僧および尼僧に「還俗の勅」が下された。全国のすべての僧および尼僧に対して不老不死の丹薬を焼煉する術、呪術、禁気(黒呪術)に通じていて、軍隊をきらい悪事を犯して軍を逃走し、体に笞打ちの刑に処せられた癒(あざ)のある者、いろいろな技術を持つていながら役に立たせないでいる者、以前に姦淫(かんいん)の罪を犯し妻を養つて戒律を守らない者、以上の者は、いずれも強制的に還俗(げんぞく)させ僧尼であることを認めない。もしも、僧尼で銭や物および米穀・田地・荘園を持っている者がおれば、それらは官に収めさせる。もし銭や物を没収されるのを惜しんで還俗を請願する者がおれば還俗するの任せ、その代わり庶民が当然負担することになっている(租・調・役・雑・役・雑徭(ぞうよう)の制、または戸税と地税)を収めさせ労務服役の義務を負わせる、という内容のものである。

長安場内の左右両街の功德使はすべての寺に通達を出して、僧尼が外出することを禁じ長期にわたって、寺の門を閉じさせた。

このように、九世紀大唐中国の皇帝である武宗(ぶそう)はひたすら道教(どうきょう)信仰にのめり込み仏法を憎んだ。僧の姿を見ることを喜ばず、仏法僧(ぶつぼうそう)三宝の教えを聞きたがらな

い。宮中長生殿にある内道場では昔からずっと佛像や、経を安置して、左右両街の多くの寺で加持祈禱の法を修め行なっている僧二十一人(一三七人)を選んで交替で順番に毎日祈念させ、日夜絶えさせることがなかった。しかし現天子は経文を焼き、佛像を破壊し、多くの僧を宮中から追い出してめいめいが帰属する寺に帰してしまった。そして道場内には道教の天尊と老子の像(天尊としての老子の像)を安置し、導士に命じて道教の経典を読ませ道教の術を修練させている。この国の慣習として毎年皇帝の降誕日になると、左右両街の仏教の内供奉(ないぐぶ)講論大徳と道教の導士を宮中に招いて内裏内で供養焼香させ経の談義をさせて仏教対道教の四人の対論が行われてきた。ところが今年はまだ道士を招いただけで僧は召されなかった。その様子を見ると、もうこれから後は、仏僧の入内を求めることはなさそうである。

道士が天子に上奏して言うには、「孔子の説として“李氏は十八代で盛運がまさに尽き、黒衣の天子が出て国を治めるようになる”

と言われております。臣らがこれをひそかに考えてみますと、黒衣とはこれ仏僧のことであります」と。皇帝はこの言葉を真に受け、これがもとで僧尼を憎み嫌うことになったのである。思うに李(り)という字を分析すると一八子となり、唐皇室の李家は現天子で第十八代に当たるから李家の運が尽きて黒衣が位を奪うこともあるかと恐れているのであろう。(高宗以来武后を加え十六代、高祖の祖父、曾祖父を加えると十八代)。

仏教、道教など宗教を統管している功德使は各寺に通達を出し、「勅に従って僧や尼僧が市中に出た場合は正午前に打つ供養の鐘が鳴るまでいては

ならない。もし外出していても、その者は必ず各寺の鐘の音の鳴りはじめる前にめいめいの寺に帰りついていなければならぬ。また間に合わないといつて最寄りの別の寺に駆け込んでそこに宿泊してはならない。もし僧や尼で寺から市内に外出していて鐘の音の禁を破り別の寺に宿泊して一夜をおくる者があれば、違勅(いちよく)の罪によって処罰するであろう」と。これまでは午後の寺からの外出が禁じられていたが、今度は鐘の音が鳴り始める前に帰っていないければならなくなった。外国僧に対する処遇が益々厳しく監視されるようになっていった

会昌三年(八四三)歳は辛亥(みずのとい)に宿る。正月一日。左街、功德使(くどくし)が上奏して言うには、勅に従って僧尼を法規どおりに取り締り制限する件については、すでに老年になって衰えている者と戒を正しく守っている者を除いて、資財が惜しくて自分から還俗を希望する僧尼は合計一千二百三十二人であると。

また右街、功德使の上奏によると、勅命に従って法規どおりに取り締り制限を加える件については、すでに年老いて衰えて戒行を確実に守っている者を除いて、資財を没収されるのが惜しくて自分から還俗を希望する僧尼は合計二千二百五十九人(正月十八日による)となったという。以上のように勅を承って左右両功德使は上奏したのである。勅文は次のとおりである。

昨年(会昌二年)十月七日および十六日の勅命に従って法規により取締まり、僧尼を還俗させよとの勅文

資財に愛着があり官に没収されるのを惜しんで還

俗を願ひ出た者に対しては、よろしくいずれもめいめい本籍地に任せて兩税戸に宛てさせよ。今後諸道にもしこのような類似の例が出て来たならば、いずれも、これに準じて決定をくだせ。蓄えている男の奴隷については僧は一人を手許(てもと)においてよい。また尼僧は女の奴隷二人まで手許に置いてよい。残りはめいめいの奴婢(ぬひ)の所有者、または本籍に戻し収めて管理せよ。もし戻る家がない者は官の所有として貨幣で売る。同様に衣と食物を入れる鉢(最低生活用具)を残してそのほかの資財は官に収監して貯えておき、後の勅令を待つて処分せよ。その僧尼が留めている奴婢でもし武芸の能力があり、いろいろな業の処方や術に通じているならば留めておいてはならない。髪を剃つて自分で勝手に僧と偽つてはならない。もし違反している者があれば寺の役僧は記録して官に報告せよ。その他の資産・金・物などはそれぞれ功德使(くどくし)の判断に任せるので功德使は自らの規準によつて取り締まり、その結果を天子に奏上せよ。」

*仏教外国僧に対する弾圧は増々厳しさを増す

正月十七日。功德使がすべての寺に通達した。僧尼で法規による取締まりと制限に該当する者はいずれも皆還俗(げんぞく)させるといふ。この資聖寺の該当者は三十七人である。

正月十八日。早朝法規該当者の還俗が終了した。左街で還俗した僧尼は合わせて一千二百三十二人、右街で還俗した僧尼はあわせて二千二百五十九人である。

正月二十七日。仇士良軍容から文書が出され左街の寺々にいる外国僧が軍容のもとに呼び集められ

た。

正月二十八日。早朝軍衛内に入った。青竜寺は南インドの三蔵宝月ら五人、興善寺は北インドの三蔵難陀(なんだ)一人、慈恩寺は獅子国(セイロン)の僧一人、資聖寺は日本国の僧三人、それに各寺の新羅(しらぎ)僧ら。さらに龜茲国(クチャ)の僧らは何という名前かわからなかったが計二十一人全員がいずれも同じ左神策軍の仇士良軍容の官署に集まった。お茶のあと、仇士良軍容が姿を見せたが軍容は親しくわれわれを慰め安心させてくれた。

二月一日。功德使から通牒が出され、それには「僧尼ですでに還俗した者は、そのときから寺に入り寺内に留まつてはならない。また保隣組(く)追い出された保外の僧尼は京に住みとどまり、場内に入ることを禁じる」とあった。

四月中旬。勅がくだつて全国の摩尼教イランの宗教)の布教者を殺させ髪を剃つて袈裟をつけさせ僧の姿にしてから彼らを殺したのである。廻鶻人(ウイグル人)が摩尼師(まにし)を崇(たつとび)重んじていたからだといふのがその理由だった。

五月二十五日。

功德使の通牒があつて、いくつもの寺に居住している外国僧が長安にやつて来た事情を調べた。巡院が菩提団(ぼだいだん)に通達する。

各寺に住むすべての外国僧等のこと

右は功德使の通牒に従つて上司の指示により調べるところ。どこからやつて来たのか、また長安城に到着した年月と寺に居住し始めた年月。

さらに年齢はいくつか、どの様な得意な才芸に通じているか。以上めいめいの名前をつけ項目を分けて申し述べよ。遅くなつたり、うそいつわりが

あつてはならない。このことはすべからく団に文書で提出すべきであり、団は指示どおり速やかに詳細に現状を項目ごとに分けて記述報告せよ。

五月二五日

六月十三日

太子簪事の口宗卿は涅槃經疏(涅槃經の注釈書)二十卷を天子にたてまつつた。今上天子は御覽になつたあと、この經疏を火にくべ焼き捨ててしまつた。その際の勅文は左のとおりである。

かたじけなくも高位に列する者は当然儒教の精神に従うべきである。しかるに邪説に溺れる者は、これこそ怪しげな氣風を扇動することであり、すでに誘惑の端緒を作つたことになり全く中国三王五帝の書(「典墳」)の趣旨に反している。高官にありながらなんとひどい墮落のしかたであることか。まして儒教の聖人をけなすなどほんらい禁じしりぞけるべきことなのにもつてのほかのことである。

外国の教えである仏教をどうしてはやしたてて宣伝するのであるか。おだやかな取り扱いをしたいとは思つても、そうすれば恐らく風俗を傷つけることになる。よろしく左遷すべきであるが、それでもなお寛大なばかりといえよう。成都府の尹(府)の長官、從三位官に任じるから馭馬により直ちに出發させよ。太子簪事の口宗卿は仏陀の数えた涅槃經の中から選び成した「三徳」二十卷、「法勅大円伊字鏡略」二十卷を天子に献上してきたので細部まですでに詳しく読んだ

仏陀はもともと西方の異民族の人であり不生不滅、空の思想を教えとしていた。孔子は中国本土の聖人であり聖人の書は利益のあることばを聞かせてくれる。しかるに韋宗卿は儒道をもともと身につ

けた人士であり官吏の家柄である。このような者が孔子・墨子の教えを広く普及させることをしないで、逆に仏陀を信じ溺れ、やたらに仏教書を作り軽々しく天子にたてまつってきた。この上中国の民衆が長くこのような者が孔子・墨子の教えを広く普及させることをしないで、逆に仏陀を信じ溺れ、やたらに仏教書を作り軽々しく天子にたてまつってきた。このうえ中国の民衆が長くこの悪い習慣に染まってしまふことは断じて許し難い。

まことによるしくこのような迷いをさまして正常な道に戻させるべきである。しかるにかれはまやかしごとを集めてはなはだしく愚かな者たちを惑わしていた。これが朝廷の行事に列する高官の位にある者のすることであろうか。

どうして自ら愧(はじ)むことがないのだろうか。そのたてまつった経は内裏ですでに焼き捨ててしまった。その草稿も中書門下に任せて探し求め焼いてしまったから、もはやこれを外部に伝えることはできない。会昌三年六月十三日勅をくだす。

『仏教の受難は続く』

現天子武宗はひとえに道教を信じて仏法を憎くむ。僧の姿を見ることを喜ばず仏法僧 三宝の教えを聞きたがらない。宮中長生殿にある内道場では昔からずっと仏像やお経を安置して、左右両街の多くの寺で加持祈祷の法を修め行なっている僧二十一人(三七人)を選んで交替で順番に毎日祈念させ、日夜絶えさせることがなかった。しかるに現天子は経文を焼き、仏像を破壊し、多くの僧を宮中から追い出してめいめいが帰属する寺に帰してしまった。そして道場内には道教の天尊と老子の像(天尊としての老子の像)を安置し、道士に

命じて道教の經典を読ませ道教の術を修練させている。この国の慣習として毎年皇帝の降誕日になると、左右両街の仏教の内供奉講論大徳と道教の道士を宮中に招いて内裏内で供養 焼香させ経の談義をさせて仏教対道教の四人の対論が行われてきた。ところが今年はまだ道士を招いただけで僧は召されなかった。その様子を見ると、もうこれから後は仏僧の入内を求めることはなさそうである。

仏教、道教など宗教を統管している功德使は各寺に通達を出し、勅に従って僧や尼僧が市中に出た場合は正午前に打つ供養の鐘が鳴るまでいてはならない。もし外出していても、その者は必ず各寺の鐘の音の鳴り始める前にめいめいの寺に帰りついていなければならぬ。また間に合わないといつて最寄りの別の寺に駆け込んでそこに宿泊してはならない。もし僧や尼で寺から市内に外出していて鐘の音の禁を破り別の寺に宿泊して一夜をおくる者があれば、違勅の罪によって処罰するであろう」と。これまでは午後の寺からの外出が禁じられていたが、今度は鐘の音が鳴り始める前に帰っていないければならなくなった

七月十五日。蘆府の討伐兵は反乱軍の領域内に進入することが出来ずにただ領界内付近をうろろろしているだけだった。天子はしきりに勅命をくだして進軍を催促したがいっこうに動向について報告がないので、「討伐軍はずいぶん長期になるのに全く討伐の成果を聞かないというのはどういうことか」とあやしんだ。これを聞いて討伐の兵たちは驚きおそれ戦線付近の牛飼いの少年や田をたがやしている農夫をとらえて捕虜として長安の都に送り届け、反乱人を捕らえて来たといひ加減な

ことを一言った。天子は勅して封刀を賜い、街路で彼らを頭・胴・足の三つに斬らせた。

左右両軍策軍の兵馬が取り囲んで殺したのである。このように捕虜と称する罪なき人々を続々と京に送って絶えることがなかった。長安城内は軍の兵馬がふだんの日でも街中に出動し、斬られた死骸は道路に満ち満ち血が流れて土をぬらし泥となった。またこれを見る人も道路にあふれ天子もときどき見にやつて来られた。左右軍の出動で旗や槍が入り乱れきらめいている。

人の言うには「捕虜として送られてくるのは反乱人ではない。ただ戦線付近の牛飼いや種を蒔(ま)いていた農夫が無実の罪を被って捕らえられて来た者である。国家が討伐のため派遣した軍隊がもとも賊の領地に入つて行かず、天子に何もしてないのではないかとあやしまれるのを恐れて、むやみに罪のない人を捕らえて長安の都に送り込むのである」と。

*左右両軍の兵士は人を斬り終わるごとにその眼の肉をくりぬいて食べる。市中のどの坊に住む者も皆言うには、「今年(今年)は長安の人は人を食う」と。
【この行記の記述の悍(おぞ)ましきには言葉を失う!】

次号に続く

参考文献 入唐求法巡礼行記。円仁唐代中国への旅

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

【1月】

・大晦日、姉一家4人やって来て、サウナ好きの家族と健康ランドでたっぷりお風呂を楽しんだ。元旦は

総社宮に初詣出、人混みをかき分けながら今年の無事をお参りした。大晦日に知人からのおせちも届き、姪夫婦が持参した海産物やお肉などで、キッチンに立ち盛り付けを……。私たち夫婦はお客様状態で、なんとも樂をし、久しぶりに賑やかな食卓を囲んだ。

・姉一家が帰り、入れ替わるように息子夫婦がやって来た。年末2人共ひどいインフルエンザにかり、やつと治った所だと言う……。翌日は曇り空の中あちこち散策を……。近くの愛宕山頂にある、火の神愛宕神社にお参り。駐車場にあるカフェで休憩、ここは知人の娘さん夫婦が営むカフェレストランで眺望もよく、ほっと一息つける場所です。ロケーションのいい景色を探しているというので八郷に戻り、3箇所ばかり回り、最後に駒村水車杉線香さんに寄ると、新年会の最中だったのに、いろいろ詳しく説明してくれた。夕方に二人が帰ると、正月も終わり、いつもの日常生活です。今年もいろいろ楽しまなくちゃ!!

“だのだの直売所”昨年より地域の農家さんたちとゆるやかに始めた小さな、かわいい、無人の直売所。私も時々買わせて頂いている。今日はそこ

で温かいものを振る舞ってくれるというので、出掛けて来た。その地域では一斉に田んぼや土手の野焼きの日で、あちこち煙が立ち登り、現地では餅つきの最中で野菜たっぷり、猪肉入りの雑煮、黄な粉餅、煮物、お新香を食べると薦められ、お腹いっぱい。久しぶりに懐かしい地域の交流にふれふと子供時代を思いだしたりした。お土産に頂いた赤米のお餅、食べるのが楽しみです……。後日、慶子さんから、「あつたまる会」にお立ち寄り頂きありがとうございますとの便りが……。

・地域の方からも「昔はよく、こういうのをやってたんだよ、懐かしくて楽しかった」との声が聞こえてきましたよ……。慶子さんご馳走様でした。おばちゃんたちが、食べれ食べれ何度も煮物を持って来てくれ、煮物が素朴でおいしく、懐かし、楽しませて頂きましたよ。軽トラで帰って行ったおじさん達がまた来年やってくんねえかな……。などと、話していましたよ、お疲れ様でした。

・久しぶりに、しっとり雨が降った暖かい朝、落ち葉でも片付けようと歩いていると、靴底にごろんとしたものを感じ、落ち葉をかき分けて見ると、立派な“ふきのとう”が顔を出していた。初物なので近所にもお裾分け。今晚は天ぷらにでもしましょう。

・昨夜、音の花束コンサート「フラワーパークとおとのプロジェクト」によるタンゴトリオ(バンドネオンの啼鵬さん、ボーカルの山下さん、ギターの角さん)に行ってきた。酒蔵を改装したスペースはフラワーパークさんの飾り付けたお花などで素敵な空間になっていて、その中で聞く生演奏、なんとも贅沢なひととき……。1階のスペース

は当面の間週末だけコーヒーなど頂けるようです。場所は石岡市内でホテルそうしや前の、冷水酒蔵です。」

・小旅行気分、みんなで骨休み、友達がちらし寿司などつくって待っていてくれた。食後はお抹茶で、まったりとした時間。楽しかったな〜。

【2月】

・茨城のイチゴと言ったら、いばらキッス。美味しいイチゴですね。先日辻のイチゴ団地に行ってきた。昼過ぎ行ったので生憎く売り切れで、近隣のイチゴ屋さん何処も売り切れ。仕方がなく辻イチゴ園でいちごパフェを食べて来た。(土、日、祝、限定で出しています、イチゴが沢山入っていたよ!)

・今日は最近開店したばかりの古民家を改造したお店でランチを楽しんだ。暫く前に仲間が予約したのですが、偶然にも今日は私の誕生日……。ランチを頂きながら、暫く若い人達の話に耳を傾け、その後、我が家でクラフトバック造り。おやつはオリーブさんでつくって頂いた抹茶ムース。またまた話が弾み、若返った誕生日でした。

・沢山の友達から、タイムラインに誕生日のメッセージが……。

古い昔の労音の仲間、ギター館時代の仲間、料理名人のHさん、映像の先生Eさん、市長のYさんほんとうに沢山の方々、ありがとうございます。

・昨夜の大風はす凄まじかったですネ……。筑波山は土煙かスギ花粉が解らないが、酷く霞んでいた。

そんな中、部落で柿園を営んでいる方が薪ストー

ブ用にと剪定した柿の枝を持って来てくれた。それも軽トラで4回も……。恐縮して、寒いのに申し訳ないと言うと、百姓は暑い寒いなんて言つたら仕事にならないよ。と……。おかげ様で薪のストックが沢山です。今日もストーブの火を眺めながらぬくぬくとしています。

・昨日いつも美味しい野菜を届けてくれるNさんから、家の近くにおかめ笹が 生えているとの情報があり、直ぐに刈り取りにいった。葉を取り除き、竹の師匠の処に持つていき、お椀入れの作り方を教えてもらった。材料はやわらかく、竹のような「ヒゴ」づくりの必要もなく、と甘くみたのが大間違い。なかなか手強かった。初めてのZさんは見事完成。才能あります。ランチは庭のゴザ等敷いた作業場で豚汁等美味しく頂いた。今日で2月も終わり。わが家も春がやって来た。

【3月】

・先日食事処「杜の家」さんが、東京のマンションに引越して行った。鳥取から知り合いも居ない石岡に来て7年。1人でお店を構え美味しい食事を提供していたが、年と共に先行きに不安を感じたのでしよう。

お店の真ん中にデンと構えていたグラインドピアノは近くの医療施設に寄贈。石岡に自分の分身だったものがあると思うと東京に行つてもいつでも思ひ出せる……。最後の別れに施設の利用者さんの前で2曲程弾いたときには、涙がこぼれたと……。私との繋がりは、食事に行った時、私の持っていたクラフトバックに興味を持ってくれ自分も作りたいとの事から交流が始まり、最後のバッグはお姉さんと買い物に行く時、お揃いで持つんだとの事で何とか間に合いました。東京に行つてもお元気で、そしてピアノに会いに来て下さ

い。

・愛宕山パノラマカフェに、今日はいつも着付けでお世話になっている鴨さんを誘つて、知人の娘さんご夫婦が営むカフェでゆっくりした。岩間の町並みを見下ろし遠くには瀬沼や霞ヶ浦も見えます。鴨さんには石岡のお祭りの3日間とその他も含め、夫の着付けで大層お世話になっています。今日も待ち合わせ場所には着物で登場しました。雪模様の中、カフェで頂いた豚汁や塩むすび、コーヒーやスイーツを頂き、ノンビリと過ごした一時でした。

常世の国 (前回からの続き) 木村 進

前回に続き、「常世の国(とこよのくに)」について紐解いていきます。

「常世の国」とは古代に不老不死の理想郷をそのような呼び方をしていたようです。

古事記、日本書紀、常陸国風土記などのこの「常世の国」という表現が使われています。

常世の国(4)・御毛沼命(みけぬのみこと)

さて、古事記や日本書紀などの古代の記述にある「常世の国」には、ここまで書いた橋を持ち帰った田道間守(タヂマモリ)の他に行つたきりで帰つてこない人物がいます。

そんな人物に焦点を当ててみましょう。

まずは、御毛沼命(古事記・みけぬのみこと、日

本書紀は三毛入野命)です。あまり聞きなれない人物ですが、初代天皇となる神武天皇の兄です。

神武天皇は第4子で、御毛沼命はその上の第3子(または第2子)とされています。

名前の御(ミ)は敬称、毛(ケ)は食物、「沼」は「主」を表わしているといわれています。

さて、時代は神武東征のとき『日本書紀』神武即位(前記)です。

神武東征時には、後の神武天皇となる弟の「神日本磐余彦尊(書紀)」「神倭伊波礼毘古命(古事記)」

と共に九州高千穂から大和を目指して進んだとされますが、熊野で暴風雨にあい、母も海神であるのになぜこのように進むのを阻むのかと嘆き、「波頭を踏んで常世国に渡った」と書かれています。

たったこれだけです。

これは、常世の国は理想郷と言うよりは「霊界」的な意味合いを持つ場所と思われる。

ヤマトタケルが走水(神奈川県)から東京湾を富津岬(千葉県)に船で渡るときに、波が荒れ、それを妻の弟橘姫が自ら入水して波を鎮めた話とどこかで繋がっているように感じます。

御毛沼命は神武東征の人柱的な犠牲になったのでしょうか？

もつとも、東京湾で入水したとされる弟橘姫も常陸国風土記の行方郡の「相鹿(あうか)」及び、久慈郡の「遭鹿(あふか)」の地名由来としてここで倭武(ヤマトタケル)は皇后の大橋比命とめぐり

会ったとされるので、古代の神話では常世の国へ渡っても死んだとは限らないでしょう。

この御毛沼命も高千穂へ舞い戻り、そこ（高千穂神社）で祀られてもいるのです。

さて、常世の国に行った話ではなく、伊勢神宮の創設に纏わる話の中に「常世の国」が出てきます。さらっと書かれていてあまり注目はされないみたいですが、少し気になるので下記に書いておきます。

日本書紀 垂仁天皇の即位25年のところです。

（原文）

三月丁亥朔丙申、離天照大神於豊稻入姫命、託于倭姫命。

爰倭姫命、求鎮坐大神之處而詣菟田筱幡（筱、此云佐佐）、更還之入近江国、東廻美濃、到伊勢国。時、天照大神誨倭姫命曰

「是神風伊勢国、則常世之浪重浪歸国也、傍国可怜国也。欲居是国。」

故、隨大神教、其祠立於伊勢国。

因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、則天照大神始自天降之處也。

（解釈）

ここには、伊勢に天照大神を祀る神宮が移された経緯が書かれています。

年代としては垂仁天皇即位25年の三月です。神話の年号はこの頃は実際より2倍ほど早く進んでいるようですので、今から推察していけば西暦2

70年前後でしょうか。

天照大神が鎮座する地を求めてあちこち探し回るのですが、天照の係りを前の崇神天皇の娘である「豊稻入姫命（トヨスキイリビメノミコト）」から垂仁天皇の娘の倭姫命（ヤマトヒメノミコト）に替えます。まだ倭姫命は幼い子どのように思われますが、霊的能力が高かったようです。倭姫命は大神を鎮座する場所を求めて、菟田（ウダ）の筱幡（ササハタ）に至り、そして引き返して近江国から、東の美濃を巡って、伊勢国にやって来ました。そこで天照大神が倭姫命に言うのです。

「この神風の伊勢国は、常世の国から繰り返し浪が打寄せてはまた帰る国です。また、大和の国の側でもある「可憐国（ウマシクニ…すばらしい国）」です。この国にいたいと思う」

そこで大神の教えに従って、ここ伊勢国に祠（ヤシロ）を建てたのです。

齋宮（イワイノミヤ）を五十鈴川の川上に立て、それは磯宮（イソノミヤ）といい、天照大神が初めて天より降りた場所です。

ここで、常世の国が伊勢国そのものを指すとも解釈できますが、垂仁天皇90年に田道間守（タジマモリ）が「非時香実Ⅱ橋」を探しに常世の国へ遣わされますので、伊勢国には常世の国から波が打ち寄せ、帰ると解釈するべきでしょう。

常世の国（5）少彦名（すくなびこ）命

常世の国に渡った人物（神）として忘れてはい

けないのが、少彦名命（日本書紀…すくなびこ）のみこと、古事記…少名毘古那神）です。

これは、大国主（大黒様、大己貴命（おこなむちのみこと））が出雲で、この日本国の国造りをしている時代ですから、いつ頃になるのでしょうか？ まあ神話ですから良くわかりません。

大国主が出雲の海岸で、国造りをどのように進めていけばよいかを悩んでいると、海から見知らぬ小人がガガイモの舟に乗って近くにやってきます。言葉もわからず汚い身なりの小人です。

この小人が「少彦名（スクナビコナ）」なのですが、書紀などの記述はここでは省きます。

出雲に渡ってきたスクナヒコナは日本語が喋れなかったが、物知りの「山田のかかし」が素性を知らせるようになりました。

どこからやってきたかは明らかではありません。言葉が通じませんので、日本から見れば異国からやってきたのでしょう。

この少彦名命は薬の知識を持っていたり、温泉を見つけてその効用を知らせたり・・・様々な知識が豊富で、大国主は少彦名命の力を借りて国造りを進めていく事となりました。

『古事記』上巻の記述では、この国を作り固めた後、少彦名神は常世の国に渡ったとあり、日本書紀では、大国主神が少彦名命と力を合せて国作りの業を終えた後、少彦名命は熊野の岬に行き、そこから「常世郷」に渡ったとあり、または淡嶋に行き、登った粟の茎に弾かれて常世郷に渡った

と書かれています。

この淡嶋の場所が和歌山県加太の淡嶋神社等、幾つかの説がありますが、栗の莖に弾かれて、空を飛んで常世の国へ行ってしまう。

空を飛んでいくので、常世の国は海の彼方なのか、天上にある国なのかはわかりません。

少彦名命は菓の神様、温泉の神様としても有名ですが、やってきた時に乗っていたガガイモの舟は天乃羅摩船（アメノカガミノフネ）といわれ、空を飛びますので、航空関係神様としても祀られています。

こんな小さな舟に乗ってやってくるのだから小人に違いないですね。

そこから後に「一寸法師」のモデルになったとも言われるようです。

少彦名命が飛んでいった先の常世の国がこの常陸国という考えもありそうに思います。

茨城で少彦名命を祀る有名な神社は酒列磯前神社と大洗磯前神社があります。

那珂川の入口の両側を抑えている大変重要な神社で、共に延喜式の大社となっています。

また、那珂川の中流域に「栗」という地域があるが、この那珂川は常陸国風土記では「栗川」とかかれており、この地に鎮座する「阿波山上神社」のご神木に少彦名命が舞い降りてきたとの伝承があり、この阿波山上神社にも祀られています。

常世の国は基本的には不老不死の国であり、理想郷とされていて、そこへは海の波を越えていか

ねばならず、中国の蓬莱山や天空の城ラピタのような天上界に近い場所にある国なども考えられます。

また、海の底の竜宮城がその国だというお話も存在します。

有名な浦島太郎の昔ばなしの元となった「浦嶋子」の話しが神話の世界や風土記にも残されていますので、興味のある方はお調べください。

常世の国(6) 竜宮城(浦嶋子伝説)

まずは「浦島太郎」の昔話(常世の国Ⅱ竜宮城と考えられる)の元になってであろう「浦嶋子(うらしまこ)伝説」について紹介しておきます。

昔話の浦島太郎については、もう皆さんは良くご存知だと思います。

(あらすじ)

浦島太郎は、浜で子供達が亀をいじめているところに遭遇し、その亀を買いつつて海に放してやりました。

すると数日後に亀があらわれ、お礼に太郎を背中に乗せて海中にある竜宮城へに連れて行きます。

竜宮城では乙姫様が太郎をたくさんのご馳走や舞で歓待し、何日経ったかも忘れて過ごしました。

地上が恋しくもなった太郎は帰る意思を伝えると、乙姫様は「決して蓋を開けてはいけない」という玉手箱を渡されます。

太郎はまたもとの亀に乗って元の浜に戻ってくる時、もうその地上では700年もの年月が経過していたのです。

太郎は乙姫様の忠告を忘れて玉手箱を開けてしま

すると中から白い煙がでてきて、太郎は白髪でしわだらけの老人の姿になってしまいました。

(いつ頃作られたのか)

この浦島太郎の話は明治半ばに、童話作家「巖谷小波(いわや さざなみ)」がまとめた『日本お伽噺』に掲載された子供向けの昔話を明治政府が学校の国定教科書に取り上げて、一般に広まったといわれています。

しかし、この話には「浦嶋子(うらしまこ)伝説」といわれる話が存在します。

この話が書かれているのは『日本書紀』『万葉集』『丹後国風土記逸文』にそれぞれあり、内容も多少違いはありますが、ほぼ同じようです。

まずは日本書紀(720年成立)の雄略紀にかかれているものを記します。(ブログ浦島説話研究所『日本書紀』の「浦島説話」より)

二十二年、秋七月、雄略22年(478年)

秋7月

丹波國餘社郡筒川人瑞江浦嶋子、

丹波國餘社郡筒川に水

江浦嶋子という人物

乗舟而釣、遂得(一)大龜(一)。

舟に乗って釣りをし

ていると、遂に大龜を得

便化(二)爲女(一)。

龜は女性に化した。

浦嶋子は女性の放つ妖

艶な魅力に感じて、女

性を妻とした。

相逐入海、到(二)蓬萊山(一)、海に入った二人は、蓬萊山に至った。
そこで、不老不死の仙人
歴(二)觀仙衆(一)。

語在(二)別卷(一)。
詳細は別巻に在る。

このように詳細は別巻によるとなっていて、これは現在見つかっていない。
一方これを詳細に表わしているのは豊後風土記の逸文だ。

詳細は省くが、概要は、
・與謝郡日置里の筒川村の住人で、日下部首等の先祖にあたる、筒川嶋子という一人の夫婦がいた。
・筒川嶋子は、美男子で、風流も類が無いほど優れた人物で、いわゆる水江浦嶋子と呼ばれた者である。

・嶋子は海に出て釣りをしていたが、三日三晩一尾の魚も釣り上げることができなかつたが、「五色龜」を得た。
・嶋子が眠っている間に、忽ち、龜は美しく妖艶な「婦人」に変身した。
・嶋子はその婦人に「人家は遙か遠く、広い海原が広がるこの場所に、どうやって来ることができたのか。」と聞いた。

・その姑娘は微笑み、「素敵な男性が一人大海原にいるのを目にし、風雲に乗りやってきたの。」と答えた。
・嶋子は「風雲とはどこから来たのか。」と聞くと、
・姑娘は「仙人が住む天上界から来たのです。お願いですから私と親しくしてくださいね。」と答えた。

・嶋子「望むところです。」と答えた。
・姑娘は「貴方が船を漕いで下さい。蓬山に行きましょう。」といった。

・姑娘は嶋子を眠らせ、海中の大きな嶋に着いた。そこは宝玉が一面に敷き詰められたように美しいところだ。

・門外の殿は暗く見えたが、内の高殿は光り輝いており、見たことも聞いたこともない世界だった。
・二人が手を取り合って進んで行くと、一軒の見事な家の門にたどり着いた。

・姑娘は「少しの間、ここにいてください」といって、門の中に入ってしまった。
・すると七人の童子が来て、この人が龜比賣の夫だね、と語り合つた。また八人の童子もやって来て同じことを言つたので、姑娘の名前が龜比賣であることがわかつた。

・戻つてきた姑娘に童子(豎子)等のことについて聞くと、七人の童子は昴(スバル)星。八人の童子は畢(アメフリ)星。です。

・姑娘は嶋子を案内して中に入ると、そこには姑娘の両親が出迎えてくれ、挨拶をして坐に座つた。
・両親は人の世と仙界との違いについて説明し、人と神とがたまたま出会えた喜びを語つた。

・珍しい数々の料理が並び、兄弟姉妹たちも酒の杯を重ね合い、仙界の人たちの歌は透き通るように響き、連なる舞も神々しかった。黄昏時になり、宴に参加していた多くの仙人等は三々五々席をたつた。

・その後、二人は肩を寄せ合い夫婦となつた。
・嶋子が仙界に留まってから既に三年の月日が流れたとき、突然、望郷の念にかられ、嘆く日々が日増しに募つてきた。

・その様子を見た姑娘は「最近様子が変で、顔色もすぐれず一体どうしたのでしょうか。理由を教えてください。」と

・嶋子は素直に、親元を遠く離れ、今は神仙の仙界にいるが、できれば故郷の戻つて親に会いたいことを告げた。

・姑娘は涙を拭い、語り合つては嘆き悲しんだが、遂に嶋子と姑娘はそでを合わせ、別れのときをむかえた。

・姑娘や父母、親族等が悲しみをこらえ見送つた。その時、姑娘は玉匣を嶋子に手渡した。

・そして、「どうか私のことを忘れないで。また再会しようと思うのなら、この匣を決して開けないでください。」といった。

・二人は別々の船に乗つた。
・嶋子はまた眠につき、瞬く間に故郷・筒川に着いた。

・しかし、その様子は一変して、嶋子は里の人に自分の家族が今どこにいるのかを聞いた。

・村人は、「あなたは一体どこの方ですか。村の古老から、昔、水江浦嶋子という人物がおり、一人で海に出たが再び帰つてこなかつたと聞いた。もう三百年余りも前のことですよ」と。

・呆然とした嶋子はあたりを歩き回るが、父母とも会うことができず、一月が経過した。

・嶋子は玉匣を撫で、神女に思いを馳せていたが、契つた約束を忘れ、玉匣を開けてしまった。

・たちまち、蘭のような芳しき本質を有した玉匣の中身は、風雲につれられて天空に飛翔してしまつた。

・神女との約束を破つた嶋子は、二度と会うことができなくなつてしまったことを悟り、後ろを振

り返り、佇み、悲嘆の涙にurenながら、歩き回るだけだった。

さあ、どうでしょう。浦嶋子のこの昔のお話がどのように現在の昔話へ変化して行ったのかは興味がわきますね。

でもこの頃の常世の国が中国の理想郷である「蓬萊山」であり、竜宮城とは言っていないですね。

また、亀がきれいな婦人に変ってしまい夫婦になるのも大きく変っている点です。

今回はもう少し検証するのは止めて、調べた事を記しておくに留めます。

常世の国（7）徐福はどこへ

常世の国は遠く離れた中国の紀元前3世紀の話を紹介しましょう。

中国では紀元前90年ころ（前漢時代）に、司馬遷により膨大な歴史書である「史記」が書かれています。

古代中国では日本の「常世の国」といわれる不老不死の理想郷と同じように、東方の渤海（ぼっかい…遼東半島と山東半島の間にある内海状の海域）の先にある神仙が住む島で、蓬萊（ほうらい）・方丈（ほうじょう）・瀛州（えいしゅう）の三神山があると信じられて来ました。

この中で「蓬萊山」がもっとも有名になって日本にも伝わってきています。

前章で書いた「浦嶋子」伝説も、浦嶋子は舟で竜宮城ではなく「蓬萊山」にいったとなっていて

すから、奈良朝初め頃は常世の国＝蓬萊山とも考えられていたのかもしれませんが。

日本最初の物語といわれる「竹取物語」（平安時代前期成立）でもかぐや姫に求婚してきた5人の貴公子にそれぞれ難題を出しますが、その5人の中の一人「車持皇子（くらもちのみこ）」にだされたのが、「東方の海上にあるという蓬萊の玉の枝（根が銀、茎が金、実が真珠の木の枝）をもってくるように」と言うものでした。

車持皇子は3年かけて蓬萊の玉の枝というものを探し出して、姫のところへ持ってきます。

しかし、そこに1000日もかけて玉の枝を製作したのにまだ報酬を貰っていないという職人が名乗り出て、これが偽物だとばれてしまいます。

まあ、この竹取物語での理想郷は「月」なのかわかりませんが、中国の理想郷は蓬萊山であるということとは日本に伝わっていた事は明らかですね。

さて、中国の紀元前に書かれた歴史書「史記」の中で、徐福（じょふく）という人物が登場します。

秦の始皇帝の時代です。

当時、占いや役、気功術などをあやつる修験者のことは「方士（ほうし）」と呼ばれていましたが、この徐福はこの方士の一人でした。方士という呼び方は紀元前6世紀ころから紀元5世紀ころまでで、道教が浸透してからは一般には「道士」と呼ばれるようになりました。

史記には次のように書かれています。（Wikiより）

り）

『又使徐福入海求神異物、還為偽辭曰：『臣見海中大神、言曰：『汝西皇之使邪？』臣答曰：『然。』

「汝何求？」曰：『願請延年益壽藥。』神曰：『汝秦王之禮薄、得觀而不得取。』即從臣東南至蓬萊山、見芝成宮闕、有使者銅色而龍形、光上照天。於是臣再拜問曰：『宜何資以獻？』海神曰：『以令名男子若振女與百工之事、即得之矣。』秦皇帝大說、遣振男女三千人、資之五穀種種百工而行。徐福得平原廣澤、止王不來。』

（現代語訳）

『、秦の始皇帝に「東方の三神山に長生不老の靈薬がある」と具申し、始皇帝の命を受け、3000人の童男童女（若い男女）と百工（多くの技術者）を従え、財宝と財産、五穀の種を持って東方に船出したものの三神山には到らず、「平原広沢（広い平野と湿地）」を得て王となり、秦には戻らなかった』（Wikiより）

このように、始皇帝に不老不死の妙薬を見つけてきますと言って、3000人も男女に民に多くの技術者を連れて、船出したが、この神山には到達せず、広い原の地に至り、その王様になって、とうとう秦国には戻らなかったというのです。

さて、この話の時代ですが、資料に寄れば紀元前210年です。

しかし、この前の紀元前219年に一度徐福は徐福（徐氏…じよふつ）は、始皇帝に不死の薬を献上すると持ちかけて、援助を得たが、7年後に

「蓬萊に行けば仙薬が手に入ることがわかったが、大鯨に邪魔され辿り着けなかった」と始皇帝に報告した。

そして、今度は「多くの男女の若者と技術者たちを連れてもう一度仙薬を手に入れます」と言葉巧みに申し出たようです。

そして、紀元前210年に上記のような大人数の船団を組んで出航したのです。

当時の始皇帝の絶対権力は甚大で、徐福などは命令には逆らえなかったようです。

この徐福という人物についてもさまざまな意見があるようです。

・ 本当はイスラエル（ユダヤ民族）の栄光ある消えた古代民族の一つの子孫

・ 始皇帝が滅ぼした斉の国の皇太子であった。（斉国の琅邪郡（現在の山東省臨沂市周辺）の出身）

・ 想像された人物で実際にはいなかった。↓
どうもこれは今では否定されており、実際に存在したとされている。

さて、3000人ものが船にのって出航するというのは、当時どの程度の舟があったかは良くわかりません。

倭国が中国へ正式に使者を派遣したのは、西暦600年の第1回遣隋使派遣です。

それより710年も前に、舟の建造技術がどの程度であったのか？ 私は良くわかりません。

3000人もの人々が、途中波にさらわれ、あちこちの島々にバラバラに到着したかもわかりません。

徐福は台湾、韓国、日本などにたどり着いてその王になったという考えがあり、中国では日本に渡ったとする伝承がかなり強くあり、この考えが日本にも伝わって、日本の各地に徐福伝説が残っているのかもしれない。

（日本における徐福の伝承）

1、熊野（現在の三重県熊野市）…波田須駅付近には徐福ノ宮があり、ここは徐福が持参したすり鉢がご神体という。

2、和歌山県新宮市…徐福の墓とされるものがあり、徐福公園が造られている。

3、福岡県八女市山内（童男山古墳）

4、その他、佐賀県佐賀市、京都府伊根町、長野県佐久市（蓼科山）…鹿児島く青森の各地に多くの伝承が残されています。

年代からか、日本の天皇家の祖であるという説もあるようです。

また、もう一つ日本で注目を集めているのは日本における渡来人集団である「秦（はた）氏」の存在です。

聖徳太子の頃の秦河勝を筆頭とする秦氏は、自ら秦の始皇帝の末裔であると称しており、秦国から百濟（または新羅）を経由して日本列島（倭国）へ渡って来たと思われる。

秦河勝（はたのかわかつ）は、世阿弥の『風姿』

花伝』によれば、河勝は申楽（猿楽）・能楽の始祖とされています。

仏教における宿神、摩多羅神などとの関係も気になる所です。

また、644年に富士川である虫を「常世の神」として祀る信仰が流行し、河勝はこれを滅ぼしていることも、この「常世の国」とのテーマですの、一言書き加えておきます。

いろいろな情報が山盛りですが、一旦この話題は終了とします

水雲問答

(8)

(木村 進)

【はじめに】

松浦静山 甲子夜話 卷39【1】より

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かつしやわ）」の中に挿入されている2人（水・雲）の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

(41) 声を先にする

雲…

凡ことを処申候に声を先と致し、実を後と致し申しべく候。喩（たと）へば研立（とぎたて）たる鉛刀は、人は是を長るる如く、大手前にかかり候こと宜しくと存候。しかしてことを簡約に成就す

べきことに候。声を大に揚（あぐ）るときは、破竹の勢を以て、成らぬこと迄押付け候。神武不殺の語甚だ関心仕候。

(訳)

およそ事を処するには声（気合）をかけることを先にし、実（行動）を後にするのが良いとおもいます。例えば、研ぎたての鉛刀は、人は皆驚くように、大上段に構えてするのが良いと思えます。しかし、ことを簡単に成し遂げるべきです。何かをしようと声（気合）を大きく張り上げて、破竹の勢いで、出来そうもないこと迄やってみることが必要です。神武不殺（じんむふさい）優れた武道は殺すこととはしない」という語にははなはだ感心します。

水…

是又見る所ある御論に候へども、実ありて声を先にするは然（しかる）べきかな。其声実に叶はざるときは事敗れ申候。黔（けん）の驢（ろ）則（すなはち）これにて候。皆この辺の御論明快に候へども、英豪の所為にして、聖賢の平実坦易の説とは逕庭（けいてい）に候間、其人何（いか）んと申計（ばかり）に候。

(訳)

この意見も又ある御論といえますが、実（実力）があつて、声（気合）を先にするのはよろしいでしょう。実（実力）がないのに声を先にしても事は成し遂げられません。これは黔の驢（けん）のろ（ば）の話と同じです。このようなご意見は皆明快といえますが、これは英豪（優れた豪傑）だけが

行えるところであり、聖賢が説く誰にでもわかる平易な説とは隔たりがあります。これはそれをやる人物次第といえましょう。

黔の驢…中国の黔（けん）というところに驢馬（ろば）をつれていったが、その地方に驢馬がいなかったので虎も最初は恐れていたが、驢馬が虎を蹴った力が弱かったので、化けの皮がはがれて驢馬は虎に食い殺されてしまったという話し

(42) 次の世に種を残す

雲…

凡そ祝融（しゆくゆう）の災大にして、火勢猛烈たるるとき、人敢（あへ）て近づかず。もし近づくときは、必ず焼爛（しょうらん）す。一時の火すら斯（かく）の如し。況（いは）んや世の季運に赴くとき、人は是を潔（きよめ）んとする愚の甚だしきなり。花の春過ぎて枯れ行くとき、郭橐駝（かくたくだ）植木屋の名人の名）あるとも是を養ふこと能（あた）はず。枯れ行くときは揚（あ）げずして、種を来春に残すを識者の業とす。治国の術また然り。

(訳)

およそ祝融（しゆくゆう）…中国の神話の火の神）の火災が起き、その火勢が猛烈な時に、人はあえてそこへは近づきません。もし近づけば、必ずと言ってよいほど焼けただれてしまうでしょう。一時の火災ですらこのようですので、世の中が衰退して末世に向かうときには人がこれをどうにかし

ようと思つても、どうにもならず、どうにかすることは大変おろかなことです。春が過ぎて花が枯れ行くときに、郭橐駝のような植木名人でもこれにどうにかできるものではありません。枯れ行くときは、種を来春のために残すのが識者の業です。治国もまた同様です。

水…

太田道灌の詠（うた）に、
いそがずばぬれざらましを旅人のあとより晴るる野路の夕立

何（い）かにも時を知らで勇往直前する者を戒（いましめ）候は、能く申とりたる哥（うた）に候。

(訳)

太田道灌の詠（うた）にあります
いそがずばぬれざらましを旅人のあとより晴るる野路の夕立
（急がなければ濡れなかつたであろうに、旅人が出て行った後に夕立も晴れた）

いかにも時を知らずに勇み立って進むうとする者を戒めるのによくできた歌です。

(コメント)

道灌の歌はその他
いそがずば濡さらましを旅人の、跡よりはるる野への村雨（むらさめ）
とも別な書にはある。

愛知県豊明市栄町にある高德院（高野山真言宗）に伝わる歌で、これが道灌の歌かどうかははつき

りしていないという。
ただ、昔から「七重八重花は咲けども山吹のみの
ひとつだになきぞ悲しき」という無名の少女の示
した歌への返しといわれている。

ここでは、そんなに退廃してゆく世を悲観して考
えることもあるまい、まだやることはたくさんあ
るでしょう。と言っているのでしょうか。

(43) 百折不撓

雲..

百折不撓(ぎょう)の気象なきときは、大事を
了(おへ)難し。喜て艱難(かんなん)を犯(お
かす)ときは、民死を忘る。この語の如く、艱難
に処して困苦の態あらはるるは英雄にあらず。機
に臨みて而(しこう)して変を制するこそ識者の
尊ぶ所に候。

(訳)

いかなる困難にも屈しないという気構えが無い
時は、大事をやり遂げることはむずかしいです。
「喜んで艱難(かんなん)・困難にあつて苦しみ悩
むこと)に対処する時は、死をも忘れる」、この言
葉のように艱難に当たつて困苦の様子が態度に表
れるのは英雄ではありません。「機に臨みて而(し
こう)して変を制する(何かが起こったときに応じ
てその変化に対応してそれを克服する)ことこそ
が識者の尊ぶところです。

水..

漢高、軍敗れて遂に苦しむことなし。大小七十

余戦を歴(へ)て、漢家三百年の基を開き申候。
其余一時に赫然(かくぜん)として芳を汗青(か
んせい)に流(つた)ふる者、皆此の場なき者は
之無く候。

(訳)

漢の高祖は、軍が敗れても苦しんだ事はありません。
大小七十余戦を戦つて(敗れて)、遂に(最
後に勝つて)漢家300年の基を開いたといひます。
このように一時は失敗に赫然(かくぜん)として
(激しく怒つて)も、かぐわしい香りを汗青(か
んせい)・火にあぶつて汗のように染み出る油を取
り去つた青竹に文字を書いたところから記録や史
記などのこと)に流す者、これらは皆、一時の失
敗に動じることがなかつた者です。

(44) 甚だよきは甚だ悪しきこと有り

雲..

夏日一天雲のなくして蒼々たるとき、忽(たち
まち)に風雷驟雨(しゅうう)の変あり。是に因
つて観(み)るに、甚(はなはだ)よきは甚(は
なはだ)あしきこと有るの語、信(まことに)
名言なり。陰陽消長の理、治乱興亡の數、皆然り。
故に大に治(おさま)れば大に乱れ、少なく治ま
れば小く乱る。それ故に厳に過(すぐ)るは、中
に却(かへつ)て下情の見へぬことあり。寛にし
て事の肅清(しゆくせい)するあり。人を威服せ
んとして却て其弊侮を受るあり。大小のこと皆々
然り。其意味玩味(がんみ)すれば深し。

(訳)

夏の日に空が一つの雲もなく青々と晴れわたつ
ていた時に、突然風雷やにわか雨が降ることがあ
ります。このによつて考えると、「非常に良いこと
とは、逆に非常に悪いことである」というのは、
まことに名言です。陰陽消長(陰陽説での陰と
陽の周期)の理(ことわり)や、治乱興亡の數も、
皆そうです。故に大いに治まれば大いに乱れ、少
なく治まれば小さく乱れるのです。

そのため、あまり厳格にしすぎると、かえつて下
情(かじょう)・民衆の気持)が見えないことがあ
ります。また逆に、寛大にしても事が治まる
ことがあります。人を威服(いふく)しようとす
ると、かえつて弊害として侮(あなどり)を受け
る事があります。大小の事みなそのとおりです。
その意味を玩味(がんみ)よく味わうことすると
結構深いです。

水..

面白く承り候。

(訳)

ご意見面白く承りました。

(45) 人の用法

雲..

用人の法は、剛柔相雜(あいまじへ)て使い候
ときは自(おのづか)ら中正に至り申候。武田信
玄、釣合の用法ふかく感心致し候ことに候。

(訳)

人を用いる法は、剛と柔をあわせてうまく使う

時には、自然にうまく真中の正しい所に至るでしょう。甲斐の武田信玄の武田家臣団の人の使い方には深く関心いたしました。

(コメント)

武田家臣団はいろいろな各地の城主などの集まりで、その家臣をまとめていくために、信玄は「我人を使うにあらず、その業を使うにあり」と言ったとされています。それぞれの者が持っている力・技能を最大限に活用させたといわれています。

水..

仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三郎兵衛、これ等芸祖人を用いるの法、武田氏則とするに足らずと存候。

(訳)

家康公に仕えた三河三奉行の「仏高力・鬼作左・どちへんなしの天野三郎兵衛」これらの者を使用したことは、家康公が人を用いる法である。これに比べて、ご意見の内容を武田氏の法則とするには足りないであろう。

(コメント)

【仏高力】…高力清長（こうりききよなが）、岡崎三奉行の一人。家康が今川の人質の時からおそばに仕え、正直者で、温順にして慈愛深く、三河一向一揆では仏像や經典の散逸を防ぎ寺院お復興に尽力した。このため庶民から「仏高力」と呼ばれた。

【鬼作左（おにさくざ）】…本多重次（作左衛門）、

岡崎三奉行の一人。思いのままに言いたいことを言い、剛直で怒りやすい性格から（鬼作左）と呼ばれたが、行政面でも優れた人物で頭も切れたといわれる。しかし豊臣秀吉を怒らせて、秀吉の命を受けた家康により蟄居させられた。

【天野（康景）三郎兵衛】…三河一向一揆で三河の家臣団が分裂の危機にあったとき康景は一向宗を改宗して家康方に付き、分裂しそうになった家康

の三河統一を助けた。三河三奉行の一人。寛厚にして思慮深く、公平無私な言行から（どちへん）（彼）は偏なしの天野三郎兵衛と呼ばれた。晩年、幕領民を殺害した自藩の軽卒を幕府に引き渡すことを拒否し、みずから領地を放棄し蟄居した。
・どちへんなし・・・何方（彼は 偏無し、どっちにもかたよることがなく、公平であるという意味（方言？））

(続く)

「ふるさと風の文庫」

下記サイトにて販売しています。

(送料は無料です。)

ふるさと風販売 Shop

URL: <https://ishioka.buyshop.jp/>

会報「ふるさと風」、ブログ等に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター（国府 3-1-16）でも常時展示・販売しています。

また、自分で書いたものを本にして見たい方も相談に乗りますので気楽にお声をかけて下さい。



お問合せは：080-3381-0297 木村まで